
隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第176号

-環境・農業・食べ物など情報の交流誌-

2006.01.26 (木) 発行 山崎農業研究所&編集同人

<キーワード>

環境・農業・健康・食べ物などの情報提供、高齢者と若者、農村と都市の
交流ミニコミ誌。山崎農業研究所&『電子耕』編集同人が編集・発行。

http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_index.htm

*****発行部数 1375 部*****

□ 目次 □-----

<巻頭言> ただ、批判し裁けばよいか 小泉 浩郎

<読者の声>

長里さんから

近藤康男先生のお悔みと励ましをいただき有難うございました 原田 勉

<80才からのメッセージ> 工夫を楽しむ男・工楽松右衛門 原田 勉

<野火止用水開通の風景>その1 用水のいわれ 安富 六郎

<老兵の戯言> 不思議な中国 藤原 昇

<農文協図書館サイト更新情報> 近藤康男先生 年譜新設

<編集後記> 政治家＝ステーツマンとは

<巻頭言> ただ、批判し裁けばよいか

新聞もテレビもライブドア問題で持ちきりだ。数週間前、現代の寵児と持ち上げてきたマスコミが、一斉にホリエモン叩きをはじめた。虚偽の情報を流した。違法ではないがルール違反だ。ほぼ同じ論調だ。「俺は最初から危ない男と思っていた」と後出しじゃんけんの評論家もいる。

だが、正直に情報を公開しルールを守れば、このままの社会でよいか。実体のない虚数をコンピュータで操作し、巨額のカネを動かす。結果の数字だけが信用され、多くはブラックボックスの中。姉齒事件も全く同じ構造だ。

わが国は、60年前まで農耕型社会であった。この60年の間に都市型社会に変貌し、そして今、情報型社会にまっしぐらである。それは市場原理で虚構を操るものが勝つ社会である。それでよいか。いま、問うべきは、この社会のあり方そのものではないか。

小泉 浩郎
山崎農研事務局長
y.nouken@taiyo-c.co.jp

<読者の声>

●長里さんから；

原田先生へ

あけましておめでとうございます。

私、秋田県の長里昭一と言います。

山崎先生との会合で二回、一緒になっています。

一回目は昭和 51 頃、「欠陥田」の問題で、

そして二回目は山田民雄先生から是非にと言われ平成 5 年冷害の報告と。

今回、先生からの報告

隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第 174 号

<80 才からのメッセージ> 「墓碑銘」と「惜別」の追悼記事

懐かしく拝見いたしました。

近藤先生の訃報は新聞で知っていましたが、とても衝撃なことでした。

近藤先生の発言、書籍等は私たちが生きてきた世代にとってかけがえない道標
でした。

今回先生の記事で、ますます残された私たちにとって今、迷路に入り込んだよ
うな農業の未来にどう立ち向かうべきかなのかと自問している昨今です。

それに、記事にある

「朝日新聞の方は、7 年前近藤先生の自宅にインタビューに訪れた記者だった
ので、これは最近 6 年の様子を知らせ、また、お別れの会にも参加してもらっ
た。」

朝日新聞の記者 清水 弟氏は私の二十代からの友人で

7年前の「近藤先生」取材に行くことは知っていましたし、原田先生のことも話しておりました。

近く又彼は連載の取材に秋田にくるそうです。

近藤先生の思い出話を二人でじっくりしたいものと思っております。

それにしても近藤先生の逝去は、日本の農業にとってみても大きな宝物を失ったような気持ちは当分消えそうもありません

原田先生がはじめた「電子耕」読み始めて数年になります。

ほとんど読むだけでしたが、このたびどうしても「近藤先生」のご冥福とさらに原田先生がご健康で、ますますのご発言を期待したくメールさせていただきました。

ご自愛のほどを秋田から祈っております。

長里昭一

●1月15日、原田勉からのコメント：長里昭一様

ご丁寧なメールありがとうございます。山田民雄さんや、山崎農研の有志にもメールのコピーをファックスで送りました。

今後もぜひ寄稿してください。特に農家の現場の声を聞きたいと思っています。

●近藤康男先生のお悔みと励ましをいただき有難うございました

(2006年年賀状より・敬称略) 原田勉

○近藤先生への“本当の意味での心の介護”誠に苦勞でありました。

山田民雄

○友人の増田さんからご葬儀のこと伺いました。80歳、90歳になるだけでも大事業だと思います。 石原八重子

○今年はお互いに近藤康男先生に学んで「70歳からの人生」をより充実させるよう努力したいものです。 阿部正昭

○近藤先生の訃報に接し、私のようなものも、深い吐息をつきました。

野本京子

○近藤先生が亡くなられて、悲しみがまだ遠のいていられないことでしょう。

いろいろなエピソードが語られることを期待しています。 梅木利巳

○近藤康男先生の年譜・履歴・著作とご丁寧な資料をお届けくださり

ありがたく頂戴いたしました。近藤先生の数々の教えを心にとどめさして
いただき、改めてご冥福をお祈り申しあげております。 松本正雄

○近藤先生の訃報を知り、ご一緒にお仕事をなさった貴兄のお心察するに余り
あります。 渡部直吉

○3世紀を生きた近藤先生の21世紀への橋渡しは原田先輩の功績です。
ご苦労様でした。 淵野雄二郎

○朝日新聞の談話拝読しました。原田さんの配慮で100歳の先生と歓談できた
のは終生の思い出です。 佐賀郁朗

○近藤先生の新聞記事の中で原田さんのことが書いてありました。

長い間近藤先生をご支援されたことに敬意を表します。 有賀祥夫

○12月19日朝日新聞で大兄の活躍の様子、近藤先生の記事を通し拝見しました。
長い農文協のお働き大変でございます。 天野昭一

○近藤先生の葬送、ご苦労さまでした。 樽見眞治

○朝日新聞の近藤先生の記事読みました。さぞお寂しいことと拝察いたして
おります。 山川喜久江

○いつも80歳からのメッセージを見えています。近藤先生の頑張り教訓に励まされ
ています。そして勉兄の頑張りにも……いつまでも80歳からの便りが見ら
れるように願っています。 原田千鶴

○近藤先生には、昭和11年東京高等農林で教えを賜り感謝のひと言につきます。
106歳で死去のおり、近藤先生の年譜・著作(リスト)など送っていただき
感謝します。小生晩学93歳なれど倒れず今日に及んで居ります。

100歳を目標に生きたいです。 吉澤二郎

○近藤先生の「お別れの会」で「農業経済学栄えて、農業減ぶ。」という指摘
を思い出しました。 清水弟

<80才からのメッセージ> 工夫を楽しむ男・工楽松右衛門

山崎農研の会員、工楽善通さんから年賀状と併せて、「先祖のことが紹介さ
れていますので」と「歴史街道」2004年12月号の抜き刷りが送られてきた。

工楽さんは、考古学者で『水田の考古学』という本の著者であり、元奈良国
立文化財研究所の埋蔵文化財センター長であった。

山崎不二夫先生の『水田ものがたり』の補論「水田稲作のはじまりと広がり」
を書いていただいた。(1996年6月刊)。それ以来、山崎農研の会員である。

私が最初原稿をお願いに奈良文化研に行ったとき、工楽（くらく）という珍しい苗字の由来を聞いたことがある。その時、ご先祖が工楽松右衛門で、大蔵永常の「農具便利論」に紹介されていると聞いて驚いた。

当時農文協では、「日本農書全集」が刊行中であり、大蔵永常の「除蝗録」や「農具便利論」は挿絵が多く、私が製作した映画「農耕の歴史」にも描かせてもらっていたからである。

工楽松右衛門は、今から 264 年前の寛保 2（1742）年に、播州高砂浦の漁師に生まれた。現在の兵庫県高砂市である。幼いころから海に出て一日中波に揺られて釣りをしていた。やがて釣り糸の手ごたえで、魚の種類が分かるようになり、季節によって魚の集まる場所や魚道が違うのを見分け、網を打つと、外れることがなかった。何事につけてもよく研究し、その才能は若い時から現われていた。

十代半ばから兵庫の廻船問屋の水夫（かこ）となり、二十歳頃は船頭となり、北前船で相当な収益を上げた。四十歳の頃独立し、北前船の帰り荷に北海道の鮭に眼をつけた。

それも塩辛い塩引でなく、鮭の内臓を抜いて洗い、薄塩を加えてワラで包む新巻鮭を開発。特別な早船を仕立て上方で売りさばいて大成功した。

しかし、松右衛門は、ただもうけるだけではだめだ。「利を窮（きわめ）るに、などか発明せざらん事やあるべきや」と次の工夫を始めた。船帆の発明である。

当時は、蓆帆から木綿に変わってきていたが、薄い綿布を二枚重ねて刺子にし、それを三反重ねて一反分とする刺帆であった。これは刺し縫いに手間がかかる上に、水分を含みやすく操帆が厄介だった。この改良を考えた。

薄い綿布二枚を張り合わせる代わりに、太い木綿糸をより合わせて一枚の厚い布地を織り上げた方が丈夫で扱いやすい帆ができるはずだ。試行錯誤を重ねた末、ようやく四十三歳のとき、織帆が完成「松右衛門帆」として瞬く間に全国に普及した。

飛ぶように売れて生産が間に合わない。普通の商人なら品薄を理由に値を上げるか、大增産して儲けるところだが、松右衛門は違った。「誰でも好きなように製造販売してよろしい。」と惜しげもなく公開した。

「天下のためになることを考えてこそ人間には禽獣と異なる生きる価値がある。」とする理念があった。自分が考えた帆によって航海の安全が保たれ、船乗りや廻船業者が得するならそれ以上の喜びはないではないか。

松右衛門は、その後も蝦夷地開発や播磨周辺の港湾整備の事業を公金に頼らず、惜しげもなく私財を投じて成し遂げた。

いずれも、当初は御用を固く辞退し、士分取り立ての誘いも断って、権力におもねるのではなく、公益にかなうと判断して初めて要請に応じたのである。

松右衛門が手掛けた事業は、港湾河川の波止場建設、浚渫、沈船引き揚げなどが主だったが、それらの工事に彼が発明したのは、ろくろ板如連（鋤簾）、土砂積船、底捲船、杭打船、杭抜船、石積船、ろくろ船など（「農具便利論」に詳細な図面とともに紹介されている）。

松右衛門の影響下に育った淡路島出身の豪商高田屋嘉兵衛も私欲に執せず、正直な商人道に徹したことで有名である。（司馬遼太郎作「菜の花の沖」で知られている）。

現代の政治家や企業人は、なりふり構わず利益を追求して恥じることなく、多くの汚職にまみれているのを見ると、人間としてのモラルを喪失していると言わねばならない。

江戸時代に、工楽松右衛門のような、学問もない、主義、思想に無縁だった人が、なぜこうも私欲を抑制し、職業人としてモラルを身に付けてきたか、現代の企業人は、何のために働くか、見習う必要があると思う。

なお、工楽善通氏は、現在、大阪府立狭山池博物館に勤務しておられます。
<http://www.sayamaikehaku.osakasayama.osaka.jp/>

所在地：郵便番号 589-0007 大阪府大阪狭山市池尻中 2 丁目

電話番号：072-367-8891

<参考リンク>

工楽松右衛門（高砂市サイト）

<http://www.city.takasago.hyogo.jp/main/rekisi/yamagata/yamakata.htm>

「水田の考古学」

<http://www.amazon.co.jp/exec/obidos/ASIN/4130241125/>

「農具便利論」

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklip/book/103edonusyo1.html>

「除蝗録」

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklip/book/102edonusyo1.html>

「日本農書全集」

<http://www.ruralnet.or.jp/zensyu/nousyo/>

山崎農業研究所会員・『電子耕』編集同人

原田 勉

tom@nazuna.com

<http://nazuna.com/tom/>

<野火止用水開通の風景>その1 用水のいわれ

野火止用水は本流の玉川上水から分岐された農村・農業用水であり、その分岐点の西武拝島線多摩川上水駅付近（当時小川村：東京都国分寺市）から北東に進み埼玉県新座市の平林寺、志木市の新河岸川（荒川支流）に至る 25km を流れている。

玉川上水（*）の完成（1653年）直後に野火止用水が着工されているから、武蔵野開拓計画は川越藩には緊急の課題であったに違いない。工事はいまから約 330 年前、承応 4（1655）年松平伊豆守信綱（川越城主）によって進められ

た。平林寺周辺では水路は幹線から3支線が分かれ、これらから小用水路が樹枝状に広がっている。この用水路構造や水路網配置をみると開発は以前から周到に計画されたと思われる。

川越の商人榎本弥左衛門（1625～1686）の「萬之覚」によれば、命を受けた安松金衛門（～1686）は、わずか40日（承応2月10日～3月20日）で水路を掘ったと記録され、開削後にすぐに水が流れたとある。ところが新井白石の「紳書」には水路の完成直後、3年の長い間、通水できなかったとされている。水が土水路にしみ込んだのである。

現在の郷土史ではこの2説について「行商人の記録が正しく、白石のは誤りである」とするようである。その理由は、白石のは自ら見て書いたものでなく誤聞であろう、これに対し行商人は実際に見たもの、ということにある。

野火止周辺の地形図を見ると低地の水田用水は近くの小河川からの灌漑である。しかし台地では河川との標高差は大きく、20mにも達するところもあり畑地への用水は困難である。地下水は夏と冬では水位の変動もあり、干天時には地下水位は低下し、生活用水にも事欠いたことは容易に想像できる。

このあたり、武蔵野一帯は冬から春にかけて秩父方面からの山越えの空っ風は強く、畑地の土は舞い上がり、風食の激しいところである。開墾は焼き畑工法によったから、平地林や薄野に野火も起こりやすかったのであろう。野火止の地名は一説には強風にあおられた野火はこの付近で止まったことから付けられた地名であるという。あるいは、室町時代（1392～1573年）にすでにこの周辺に野火を止めるための火見塚があったからとも言われている。この地名は武蔵野の乾燥した情景をよく表わしている。

*No.160～169「玉川上水の謎」参照

山崎農研会員 電子耕編集同人 安富六郎
y.nouken@taiyo-c.co.jp

<老兵の戯言> 不思議な中国

先日、アメリカと中国の首脳会談が行われ、双方のコメントが報道された。両国間の大きな違いは「民主主義と人権問題」であった。その数日後、あるT

V番組で「北京オリンピックに日本は参加するのですか」という突拍子もない発言、「4月の反日デモの時、日本はオリンピックに参加しない、と表明すべきだった」という意見、「今でも、中国では、相当な報道管制が敷かれている」という意見が出た。

1990年の初秋、筆者は、ある国際会議に招待され、初めて北京を訪れた。会議の後、エクスカージョンで「明の十三陵」を訪問した。王朝の棺は、地下深くに納められており、見学者は地下に降りて行った。その時、欧米の研究者は誰一人として、地下に入ろうとしなかった。筆者が階段を降りようとしたその瞬間、ドイツ人研究者夫妻が云った「あなたは、中国を信じるの？もし、地下で爆発でもあったら、どうするの？」と。夢想だにしなかった言葉に「はっ！」とした。「なるほど」彼等は、この国を信じていないのだ。それは丁度、あの「天安門事件」の翌年であった。

あれから15年、中国は「未だに」世界の人達に「認知」されていないのだ。北朝鮮やロシアと同様、依然として「一党独裁国家」で、何が起こっても不思議ではない国だ。

先日、久しぶりに、筆者を訪ねてくれた教え子の北京大学教授が「先生、私、定年退職したら日本にきます、中国は駄目です」と言った。後15年、彼女の定年まで。日本と中国は、どうなっているのだろう。草場の陰から、見守っていたい。

藤原 昇

山崎農業研究所会員・中国・浙江大学・客座教授

y.nouken@taiyo-c.co.jp

<農文協図書館サイト更新情報> 近藤康男先生 年譜新設

昨年12月12日の近藤康男理事長「お別れの会」で配られました冊子

『故 近藤康男先生 年譜・履歴・著作』

(「年譜」執筆、「履歴」「著作」編集/原田勉)

制作/農文協・農文協図書館

を、もとに以下のページを新設・更新いたしました。

1/20 近藤康男文庫・年譜新設

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/book/071kondoubunko5.html>

(今後、写真を掲載予定です。)

1/24 近藤文庫・履歴更新

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/book/071kondoubunko2.html>

・著作年表更新

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/book/071kondoubunko3.html>

農文協図書館

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/>

<編集後記> 政治家＝ステーツマンとは

「政治家」は英語で **statesman** という。**state** (ものごとをはっきりと述べる)
man (人) というのが語源らしい。

先の総選挙で、自民党の武部幹事長はホリエモンこと堀江貴文氏を「彼はわたしの子どもです!」と持ち上げた。小泉首相らも同様である。

statesman である以上、言葉を大切にしないといけないのは当然である。そして、言葉で訴える場合、その要素は、知識 (情報) と理論 (理屈) と情ということになる。

昨年の小泉劇場は、情報も不十分、理屈もなく、情に訴えたにすぎない、といったら言い過ぎか。

2006年01月26日

山崎農業研究所会員・田口 均

◎お願い「<読者の声>の投稿規定・メールの書き方」

-
- 1、件名（見出し）を必ず書いて下さい。「はじめまして」は省略して、言いたいことを具体的に。
 - 2、氏名・ハンドルネームは、文末ではなく始めのほうに。
 - 3、1回1テーマ、10行位に。
 - 4、ホームページを持っている人は、文末に URL を。
 - 5、JIS X0208 規格外の文字（機種依存文字）のチェックを。

<http://www.chem.sci.osaka-u.ac.jp/networks/check/jisx0208.html>

インターネットで使えない丸数字や半角カタカナ、括弧入り略号などは文字化けの原因です。

◎投稿アドレス変更のお知らせ

電子耕への投稿アドレスは、発行人の変更に伴い、

y.noken@taiyo-c.co.jp

となっております。投稿される方はこちらのアドレスをお願いします。

次回 177 号の締め切りは 02 月 06 日、発行は 02 月 09 日の予定です。

★『メールマガジンの楽しみ方』発売中

書名：岩波アクティブ新書 45『メールマガジンの楽しみ方』

著者：原田 勉 定価：735 円 発行日：2002 年 10 月 4 日

発行所：岩波書店 ISBN4-00-700045-X

まえがき・目次・著者紹介・注文方法はこちら

<http://nazuna.com/tom/book.html>

『電子耕』から大切なお知らせ

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag.html

<本誌記事の無断転載を禁じます>

隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第 176 号

最新号・バックナンバーの閲覧

<http://blog.mag2.com/m/log/0000014872>

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

購読申し込み／解除案内

http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag2.html

2006.01.26（木）発行 山崎農業研究所&編集同人

<mailto:y.noken@taiyo-c.co.jp>

*****ここまで『電子耕』*****